失敗の中からも人は学び、成長する
―1 年間の SL 活動を通しの気づきや学び―

社会福祉学部社会福祉学科 2 年　許　小喜
活動先：NPO 法人エンド・ゴール
クラス：岡　多枝子　先生

1. はじめに

私は、人と関わり深い仕事、特に福祉のように他人の人生と密接な関係を持って働く人にとって多様な人生の経験を積むことはとても大切だと考える。最初、私がサービスラーニング（以下 SL）を希望したのもこのような理由があったからだ。SL は学校と福祉現場の接点として学生を福祉の現場につなげ、学内だけの学習ではなく学生の学びが実践できるようにその場を提供している。そして、SL の活動は学生個人の成長を助長させる機能を果たしている。最初は SL の意義がよくわからず、とまどったこともあったが、今考えてみると、SL での学びができたことは、普段、大学の中から学べないものを学べたとても有効な時間で、貴重な経験であった。

2. SL を通しての自分の成長と気づき

1)目的「夢」のために、目標の重要性

エンド・ゴールの活動が始まった初日、代表の大久保氏から、「小さなことでも活動の前に、その日の目標を設定し、主体性を持って、活動してほしい」といわれた。「なぜ目標が必要なのかというと、それは最終的の目的達成のためで、例えば、営業においても自分が販売 1 位になりたいという目的を持っているとしたら、具体的な計画、つまり 1 日商品 100 個売るという目標設定をしないとその商品 100 個を売るための工夫もしない。結局、目的があっても実現しにくい」という話しだった。正直、当時は頭では理解できたが、その言葉の意味についてはあまり、理解できていなかった。

ところが、活動が終わってから、そして SL を通してこの 1 年間を経てから、その目標の大切さにようやく気づくことができた。私には夏休みの活動が終わって、しばらく自分の目的が見えなくなった時間がある。大学での学びが、何故自分に必要なのかまで悩んでしまい、周りも見えなくなってしまった。しかし、このような時間があったから自分をゆっくりと見つめることができたかもしれない。

誰にとっても、人生の目的を常に念頭において行動することは難しい。しかも、目的は「～したい、～なりたい」という漠然とした形で忘れがちなものである。このような私たちに目標は努力すればするほど、目に見える結果がすぐ出るもので、具体的に夢を実現させる一つの方法であり、人々が目的（夢）のために頑張る原動力として働いている。そのため、具体的な目標設定ができている人こそ、自分の目的、つまり夢を実現しやすくなると思うのである。

2)自分と他人との違いについての気づき、そして学び

私と同じ活動先のメンバーだった青木君は積極的で、責任感も強い人柄でかなり頼り

になる人だった。この１年間は彼にたくさんのことを助けられ、積極的な姿勢には感心し、自分にとってとても良い刺激になったのである。しかし、知らず知らず、彼と自分を比べてしまい、自分を追い詰めたことがたくさんある。彼にはできることが何故自分にはできないかと落ち込んだこともある。

確かに、人にとっては能力の高い人間がいれば、そうではない人もいる。しかし、能力が高いからといって必ずいい人とは限らないし、それが一番価値のあることだとは限らない。人は、それぞれ持っている素質や能力が異なり、いくら相手と比較したところでもその人自身には成り切れない。自分にふさわしい生き方、つまり、自分らしく生きることが何よりも大切であることがわかった。

3. 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

働かない、または働けない問題にについて考えてみると、 堀有はこのことについて次のように「仕事とは単に収入を得るだけの手段ではなく社会と個人をつなぐもので、自尊心を与え、自立の根拠となるものである」と述べている。そのように、人間が自分らしい生活を営むうえでも仕事はとても重要な役割を果たしている。しかし、現在の厳しい状況の中では働きたくても働けない若者がたくさんいる。

エンド・ゴールはこのような若者の自立を求め、目標を持って挑戦し続ける若者をサポートする団体で、大学と社会の間をつなげる架け橋としての仲介役を担い、実践力あるリーダ育成に力を尽くしている。エンド・ゴールの大きな特徴として、新たな宣伝方法を起用したことが取り上げられる。当初、エンド・ゴールは就職支援のため、多くの若者にサポートステーションの存在を知ってもらうように PR キャラクターを起用した。 その「若者の就職支援」を目的に誕生した PR キャラクターは 現在では「知多半島の活性化」にも広がり、地域住民、そして日本中に広がる影響力ある様々な活動を行っている。

＜エンド・ゴールでの話し合いの様子＞

【参考文献】「若者統合型社会的企業」の可能性と課題・堀有喜衣・
『Business Labor Trend』2011 年 10 月号